



高速増殖炉「常陽」

茨城県大洗町の日本原子力研究開発機構「大洗研究開発センター」で作業員 5 人が被ばくした事故があったことを知らされたのは 6 月 6 日でした。ここには「もんじゅ」と同様、ナトリウムを冷却用の媒体とした実験炉である高速増殖炉「常陽」が設置されています。廃炉が決まった「もんじゅ」に続くものとして、研究がされていますが、現在はフクシマの事故を受けて、休止中でした。それなのに、事故が起きました。

大洗研究開発センターのホームページでは経済効率を謳った文言を掲載しています。

「常陽」は、燃えない“ウラン 238”を燃える“プルトニウム 239”に変えることができ、運転しながら、消費するよりも多くの燃料を生み出すことができます。この結果、ウランを 60 倍も利用できるようになり、ウラン資源を有効に利用することが可能な原子炉です。

安全管理に関しても、理想的な言葉が記されています。

線量率が高いものを直接取り扱うことがないように、遠隔操作のための装置や器具を使用して不要な被ばくを防ぐようになっています。



放射性物質が入った容器を包んでいた同型のビニールバッグ(日本原子力研究開発機構提供)

この被曝事故は燃料研究棟 108 号室(管理区域内)で起きました。核燃料物質を入れたビニールバッグが破裂し、作業員 5 人が汚染されました。作業員は作業中にプルトニウムを保管しているビニール袋が破裂したことで放射性物質を吸い込み、そのまま肺を通して血液や骨も内部被ばくした可能性があるとして報じられています。作業員 5 人の肺から、最大 2 万 2,000 ベクレル(Bq)のプルトニウム 239 が検出されました。この作業員の総被曝量は 36 万ベクレルになるということです。

放射性物質がビニールバッグに？私のイメージとかかけ離れています。直接？遠隔操作？どっち？

この管理、取り扱いの作業は、当たり前だったのでしょうか。人間の命があまりにも軽く、安く、粗末に扱われているとしか、思えません。また、なぜ破裂したのかはまだ不明とのこと。

1 ベクレルは 1 秒間に原子核が 1 個崩壊することを表しています。この値が大きければ、放射能が強いということになります。だから、作業員の体内で、プルトニウム 239 は 1 秒間あたり 2 万 2,000 個の原子核がこわれて、細胞を傷つけていることになります。半減期は 2 万 4,000 年以上と記されています。作業員の方が受けたこのダメージの内容を正確に知ることはできません。私には放射能の能力を理解したり、その数値の意味を理解することが非常に困難です。こういう理解でいいのでしょうか。そうだとすれば、あまりにもひどい事故です。国内では、最悪の内部被ばく事故と報道されています。いいえ、フクシマを知っている私にとっては、事故と言うより、日本原子力研究開発機構の杜撰さによる事件としか言いようがありません。

ひとたび事故が起きたら、被害者の身体に計り知れない被害を与えます。それなのに、直接、害体に触れ、それを取り除く事は出来ないのが放射性物質です。作業員の方々の苦痛を思うと、なんといいでしょう。すべての原子炉は止めるしかありません。